

雨
露
霜
雪

大晦日——。

田沢湖駅で降りた客は、二人と一匹だけだった。

折しも、雪降りしきる夕刻。肌を刺すような寒さが、彼らを出迎える。

二人と一匹は、列車が行ってしまうのを見送ると、改札へと歩いた。

一人は黒い着物を着た、年の頃はまだ一〇歳にも満たないであろうか？ 背の小さな少女だった。番傘を持ち、とてとてと歩くその所作はまるで七五三のよう。

もう一人は自分の背丈に余るほどの長い包みを抱え、すたすたと歩く銀髪の少女。先の着物の少女よりは少しだけ背が高い。抱えている包みは、その形状からおそらく薙刀なぎなたであろう。背には深編み笠、腰には同じく布に包まれた長細い棒状のものが二本。おそらくこちらは日本刀であろう。物騒な出で立ちだ。そして極めつけは深緑の色鮮やかな袴はかまが目立つ、巫女装束まこしやうぞくを身につけていた。

最後の一匹はほぼまん丸と言って良い、おそらくは、いや、たぶんではあると思うが、黒猫であった。唐草模様の風呂敷包みを背負い、キリリとした表情はしているものの、どうみてもまん丸いので緊張感は伝わってこない。

それも当然で、この黒猫は寒いのを堪えるばかりに表情が陰かげしくなっているだけなのである。黒の着物の少女はガラス張りの駅舎から出ると、持っていた番傘を差しながら口をへの字に曲げて恨めしそうに天を見上げた。

空からは雪が無節操むせつそうにサラサラと落ちてくる。

それは無限いっくえに幾重にも続いているように見え、遠近感が少し狂う。

「まったく……」

着物の少女から、大きなため息が聞こえてきた。

「朝の六時には出たというのに、着いたのは夕方とは一体どういうことだ？」

そしてガラス張りの駅舎へと視線を移した。

「昨晩からの大雪で除雪作業が手間取ったのだから仕方ない。それに年末ダイヤが重なった」

もう一人、巫女装束の少女が深編み笠をかぶると、ぼそりと口答えた。

「盛岡もりがわで半日近く待たせおつてからに……」

「電車が出ないと聞いて、嬉々ききとしてわんこそばを食べに行ったら口が、それを言うかぬ」

ずっと黙っていた黒猫が、初めて口を開いた。どうやらこの猫は言葉を喋るらしい……。

「ん、あー、いや一二杯で敗北したことは認めよう」

わんこどころか、最初に出された二〇杯も完食できなかった。とはいえその小さな身体では当然かもしれない……。

しかもその後、食べ過ぎで二時間は動けなかったのだ。

「出してくれたただけ有難いと思うぬ」

「三〇〇〇円も取られたぞ。わたしはお代わりしてないのに」

「その値段は量に関係ないぬ」

「納得がいかん」

「わたしは、元が取れた」

一方の巫女装束の少女はぼんぼんとお腹を叩くと、満足そうに微笑んだ。よく見ると腰紐には一〇〇杯以上食べるとお店からもらえる手形がぶら下がっている。どうやらこの少女は、わんこそばを一〇〇杯以上平らげたようだ。

「ちあらのどこに、それだけの蕎麦が入ったのか、不思議で仕方がない」

着物の少女は巫女装束の少女、月夜野ちあらのお腹を軽くさすりながら、首をかしげる。確かに中はパンパンに詰まっているような感じはする。

「この手形、欲しかったから」

ちあらは誇らしげに、一〇八杯と書かれた手形を掲げた。

「クッ、羨ましくはないぞ」

着物の少女はぶいとそっぽを向くと、歩き始めてしまった。

「黒翼、くやしそう」

ちあらがぼそりとつぶやきながら、後に続く。

「お……わたしを呼ぶときは、様をつけると何度言えばわかる」

「わんこそばでわたしが勝ったから、今は様をつけなくてもいい」

「な！ いった勝負すると言った!？」

「さっき、一二杯で敗北と言った。私の勝ち。間違いない」

「ぐ……」

他愛もない会話が続きながらも二人と一匹は駅前の道路を渡り、バスやタクシートの乗り場があるロータリーへ。

「んー、タクシーは………」

黒翼は自然とバス乗り場へは向かわず、タクシー乗り場へと足を向けるが、それをちあらが腕を伸ばして黒翼の着物の首裾をつかんで制止した。

「んが！」

急に首を捕まれたものだから、足だけが前に出て思わず後ろへずっこけそうになる。

「なにをするか！」

ちあらの手を振り解くと、黒翼は番傘でちあらの手の甲をベシリと叩いた。

「タクシーは高い」

するとちあらは先ほどのわんこ蕎麦のレシートを黒翼の前に突きだした。一人三〇〇〇円、二人で六〇〇〇円、消費税込みで六四八〇円である。充分、タクシー代になったはずだ。

「何を言うか、時はすでに一七時を回っている。急がねば……!」

「そんなに急いでいるなら、術で来るべき」

「これから山ほど術が必要になる。今は術を使うべきではない。それに……」
黒翼は言葉を切ると、真剣な表情かおをした。

これからの自分たちの行いが、果たして正しい選択なのかどうか……黒翼は考える時間が欲しかったのだ。考え、悩み、そして決断するための時間が……。

そしてこの田沢湖駅に降り立ったとき、黒翼は決めたのだ。

だからこれからは一刻も早く、その決めたことを実行しなければならぬ。

「それに？」

黒翼の真面目な表情から、続く言葉が重要だと思ったたちは、次の言葉を待った。

「いや、やはりバスで行こう」

他に最善手がないか考え続けることは必要だと思っただけだった。

もう少し考えよう。

バスでかかる時間の分だけ。

* * *

八幡平はちまんたい行きいのバスの中はこれまた二人と一匹だけだった。

だがそれよりも何よりも、車内が暖かいのが救われた。一二月に入ってからこっち、東北は

雪が多いようで、周囲の景色も白一色だった。

ゴトゴトとストロークの長い揺れに二人と一匹は長いシートに身を任せると、なんとなく外を眺めた。

相変わらず激しく雪が降り続けている。

聞こえてくるのは、バスのエンジン音と、そして車体の軋む音だけ。

程なくするとバスは坂を上がっていく。

その坂からは田沢湖が広がっているのがよく見えた。

大雪が降っているというのに、その湖面は濃く、深く、美しい青色を湛えている。

龍の湖だ。

「ん……目指すは草薙旅館？」

不意に、隣りにいたちあらが沈黙を破った。

「そう。かつてわたしが居候していた。ここからそう遠くない。一〇分か二〇分で行く」

黒翼はちあらの方にも向かず、そう答えた。

「ん……これ」

するとちあらは懐からスマートフォンを取り出すと、画面を横にして黒翼に見せた。

「なに？」

黒翼はめんどくさそうにしながらも、差し出された画面へと視線だけ送る。

画面には地上デジタル放送が写し出されており、そこには見覚えのある旅館が映っていた。『はい、そうなんです、今日は大晦日。秋田の大晦日と言えは……！そう、なまはげですよ。なまはげは男鹿半島おがを中心に……』

なにやらレポーターが見覚えのある旅館の前で、なまはげの話をしている。

「なんだこれは」

めんどくさそうにしていた黒翼の目が見開かれ、その後、さらによけいにめんどくさそうな表情になった。

「NHKが草薙旅館に来てる。これ、生中継。駅にあったテレビを見たとき、聞き覚えのある旅館の名前が流れてきたから、まさかとは思ったけど」

「……………」

時刻は一七時三〇分を少しまわったところ。夕方からの情報番組か、ニュース内の一コーナーであろう。画面の右上端には「秋田県田沢湖町、なまはげでお客様の厄払いやくはらい」などというテロップが表示されている。

『なんとこの草薙旅館では旅館の従業員の皆さんが、なまはげに扮ふんして宿泊客のお子さん達のところをまわっていくというイベントをしてるんです』

スマートフォンの低音がまったく聞こえないキンキンしたレポーターの声がバスの中に響き渡った。

「よりもよって、なんでこんな時に……」

黒翼はちあからから奪うようにスマートフォンを取り上げると、ギリリと歯を噛みしめた。自然と身体全体に力が入る。

と、同時に自分の決めた心が、少し揺らぐのが解る。

第三者の存在はその決心を揺るがす。

いや、もう決めたことだ。そこに何があるうが……。

「やるしかない」

ちあらも決心は固いようで、深くうなづく。

「もう時は、待ってくれない」

そして、腰にしてある二振りの刀を、しっかりとつかんだ。

「……」

黒翼は、ただ、無言だった。

* * *

「かなちゃん！ かなちゃん用のなまはげのお面、やっとできましたよ」

「お、おう、ちょっと待ってくれ……お客さんの邪魔にならないようにテレビの人を誘導しな

いと……」

「えっと、お子さんがいる部屋はわかる？」

「ああ、叶かなみからリストをもらってるよ」

「すみません、女将おかみさんはどちらにおられますか？ インタビューに……」

「え？ あ、それなら汐うしお……若女将に」

「え、私？」

「D！ディー広間撮ったら次どの部屋から回るんすか？ カメラ、廊下で渋滞しちゃってますよ！」

「リハーサルしただろ！ 憶おぼえてないのか！」

「部屋リストとリハーサルの道順がなんか違うんすよ」

一方の草薙旅館は、テレビの対応で大わらわだった。

旅館にテレビが来るのは初めてだし、大晦日と言うこともあって年末年始を過ごすお客で客室は全て満室だった。

廊下という廊下には電源と信号のケーブルが張り巡らされ、要所要所に照明が焚たかれている。そこをちよっと済まなそうに宿泊客がケーブルをよけながら歩く。

まあ大変なのはなまはげイベントをするほんの数時間の間だけだ。

などこの旅館の若旦那わかだんな、草薙枢くさなぎかたなめは思った。

「じゃ、もう一回ルートの確認を」

「若女将さんはこちらでインタビューを」

「あ、はいはい」

「はい」

若旦那の草薙枢は大広間へ、若女将の草薙汐はTVクルーに先導され、草薙旅館の表玄関へと向かった。

二人ともまだ草薙旅館を継いではいないため、「若」がついている。

表玄関へ出ると、そこもTVクルーが何人か忙しそうにしていた。地面には無数のケーブル、よく解らない放送機器類や発電機、表には中継車。カメラマンはそれらがうまく入らないように、汐の姿を映し出した。

降りしきる雪に、汐の真っ白な髪が溶け込みながらも、美しくなびく。

『スタジオの皆さん、それではこの旅館の若女将、汐さんに来ていただきました』

『こんにちは』

『凄く可愛らしい女将さんですね』

『え……そんな……』

『汐だ』

バスの中でスマートフォンを見ていた黒翼が、ぼそりつつぶやく。

「これが白龍……」

ちあらがゴクリと生唾を飲んだ。いつの間にか緊張している自分に気付く。

「一番の障害は、この汐と……」

それからテレビの画面を隅々までのぞき込むが、もう一人の厄介者やっかいが見つけられなかった。

「ターゲットはどこ？」

「テトメトがみつける」

「吾が真っ先に旅館に潜り込んで、見つけるぬ」

「汐の相手はわたしがする。あとはまかせた」

「わかった」

ちあらは頷くと、スマートフォンを懐に戻した。

それから、降りるバス停に着くまで、二人と一匹は何も話さなかった。

* * *

バスから降りると、寒さに一震ひとぞろいして、テトメトが旅館の方へと駆けていった。ずんぐりとした身体なのに、素早く塀に駆け上がると、旅館の向こうに消えていく。

バス停からは草薙旅館の入り口が見え、中継車やTVクルー用のワゴンが何台が止まっているのが見える。

ちあらが拵袋のヒモを解き、いつでも刀を抜けるように、鞘ごと帯にセットする。

『草薙枢、発見ぬ』

二人の頭の中に、テトメトの声が届く。

同時に旅館内の様子がまるで走馬燈のようにばばばーっと二人の頭の中に展開され、それは屋根のない上空から映した映像になり、ちようど見取り図となった。

玄関から大広間への道順が示され、そこに至るまで大広間にいる人間の数とそれぞれの役割、そして草薙枢の位置が記される。

「薙刀をテトメトに預ければよかった」

ちあらがぼそりつつぶやく。

「もう一人の厄介者が出てきたら、薙刀は必要かもしれない」

黒翼がテトメトにその厄介者の名前を送る。

『ちよっと待つぬ』

そう言っている間にも、玄関から広間までの様子は逐一、二人の脳内に送られてくる。せわしなく行き来するTVクルー、広間には撮影用を集められたと思われる、宿泊客の子供と親子、打ち合わせをしているTVディレクターと草薙枢。

玄関口の汐のインタビューが終わったら、枢のところにカメラが切り替わるのだろうと黒翼は予想した。

『紗乃末璃サノマツリは客間にいるぬ。子供たちに囲まれているぬ』

見取り図がざざざーっとスクロールして、大広間と廊下で通じている一番最初の客間にフォークスが移る。そこには楽しそうに子供たちと会話する紗乃末璃の姿があった。

『紗乃末璃は丸腰ぬ』

『わかった術だけは使わせるな』

『御意ぬ、紗乃末璃は吾がマークするぬ』

会話はここで終了である。あとは、行動するのみ。

黒翼は番傘を差すと、バス停から草薙旅館へとゆっくりと歩き出した。

ちあらがそれを見送る。

雪は相変わらず、激しく降り続いていた。

黒翼の姿が消えると、ちあらはスマートフォンを取り出して、中継を見る。まだ汐のインタビューは続いていて、その後ろを黒翼の番傘が通っていくのが見えた。

『あ、え、ええ!?! クロちゃん!?!』

番傘をさした見覚えのある和服の少女が正門から入ってくると、すーっと自分の後ろを通り過ぎていく。インタビュー中にもかかわらず、汐はびっくりして後ろを振り返ってしまった。

『若女将さん!』

インタビューアが慌てて汐を注意する。

『あ、わ、ご、ごめんなさい、座敷童子ざしきわらしが帰ってきたから……びっくりして』

『え、座敷童子ですか？今の和服を着た女の子がですか？座敷童子って……見えるんですね』

あまりにも予想外の答だったので、レポーターもアドリブができずにキョトンとしてしまう。

『あ……』

汐はレポーターの言葉で我に返り、黒翼が本当は座敷童子なんかではないことを思い出す。

黒翼が求めていたものは既にこの町にはない。

その後、どこに行ったのかも、汐は知らなかった。

それなのに、何故この旅館に、また戻ってきたのか。

もし戻るなら、この土地の神であり、そして龍でもある自分にまず戻ることを知らせるので

はないのか？そもそも、黒翼ほどの力ある者なら、自分の土地に入った段階で解るはずなの

に……黒翼は、気配を消してこの土地に侵入した？

『すみません！放送をいったん中断していただけますか!?!』

汐は胸騒ぎがして、すぐに黒翼の後を追った。

『あ、若女将さん!?!』

と、レポーターが汐を追いかけてようとしたところで、映像がスタジオへと切り替わった。

ちあらは深編み笠をより目深まぶかにかぶると、一気にバス停から飛び出し、草薙旅館の前にいた

カメラクルー三人をほぼ瞬時に落とした。薙刀の柄で急所を突かれて、ぐらりとカメラマンが

折りたたみの椅子から転げ落ちる。もちろん、ケーブル類の切断も忘れない。

さらに、中継車に走り込む。

映像の異常に気付いた一人が中継車から出ようとしていたところだったが、まずその一人を転かして急所を打つ。同時に鈍い音。どうやら転かすときに膝の関節をやってしまったようだった……。ちあらは心の中で謝りながらも、ＴＶクルーの首を絞め落とした。

すかさず、中継車の中に入り、中にいた二人も落とす。

中継車の外に出ると、レポーターが半ば諦めの表情で、マイクを握ったまま玄関口から出てきたところだった。

そのレポーターに向かって一氣に間を詰めると、今までと同じように頸動脈を打った。

ぐらりと足から崩れ落ちるレポーターの頭をそっと抑え、そのまま頭を打ってしまったくないようにゆっくりと寝かせると、ちあらは一段落と言った様子で、ふうと短くため息をついた。

もともとＴＶの中継などなければ……などと思う。

一方の黒翼は、早足で長い廊下を突き進んでいた。

太いケーブルをまたぎ、ＴＶクルー達を避けながら、どんどん進んで行く。

そして大広間の前まで来ると、そこでたむろしているカメラマンやＡＤ達を見上げて話しかけた。

「この向こうが、撮影現場かな？」

「お、客の子かな？」

「入れて差し上げろ」

「もうすぐ撮影だからね、入ったらメガネのおじさんの指示に従ってね」

などと言われながら、黒翼は大広間へと通された。

大広間では左手奥に宿泊客がいるのが見えた。子供と、その父兄。

視線をもう少し手前に移すと、何かメモを見せあいながら会話をしている草薙枢とＴＶのディレクター。メガネのおじさんとは、このディレクターのことだろう。

大広間の右側には仕切りとしての麩がならんでいて、この麩の向こうに従業員のなまはげが待機していると思われる。

人が多すぎる、と黒翼は思った。

「何か異常を感じたら、客達を優先してこの広間から逃げるように誘導して」

黒翼はそばにいたＴＶクルーに、そう話しかけると、広間へと足を踏み入れた。

「は？」

というＴＶクルーの言葉を背に、黒翼は初めはゆっくりと、それから徐々に早足になりながら、畳の上を無音で草薙枢に向かう。同時に持っていた番傘を後ろに構えた。

「かなちゃん!!!」

汐の叫ぶ声。

その声に気付き、顔を上げる枢。

その枢の胸元には、すでに黒翼がいた。

「うお!？」

「お命、頂戴……！」

とは言ったものの、汐が間に合っている時点でこの攻撃は当たらないと黒翼は頭の中で思う。

「おうわ!!」

案の定、枢とTVディレクターはなにやら強い風を受けて、広間の向こうの方へ飛ばされていく。黒翼が番傘を振りかざす余裕もなかった。

「チッ……汐め」

舌打ちをする黒翼。

黒翼を飛ばすよりも、ただの人間である枢やTVディレクターを飛ばす方が遥かに楽である。ずっと平和ボケしていた割には、的確な判断が下せているなど黒翼は感心した。

黒翼は畳を蹴ると、一瞬で枢の懐に飛び込む……つもりだったが、手に持っていた番傘がバラバラになっていく。

白いキラキラと光るものが宙を舞い、番傘をズタズタに切り裂いていた。

「あーあ、高かったのに……」

黒翼は柄だけになった番傘をぼいと捨てると、またもう一本、どこから番傘を取り出した。

「いててて……何が何だか……確かクロハがいたような気がするんだが」

一方の柩は頭をさすりながら、ようやく起き上がった。

顔を上げると、いつの間にか汐が自分の前に立っており、そしてその向こうに番傘を持った黒翼が見える。

「お客さんを広間の外へ!!」

汐が叫ぶ。

同時に広間の中が騒然となった。

「なんだなんだ？」

事態を把握はあくしていない柩は、後ずさりながらも廊下への大広間の魅を解放した。TVクルーたちも客を廊下側へと誘導する。

「これは鱗うろこか……」

黒翼は宙を舞う、白くキラキラ光るモノを一つつかむと、天井の明かりに透すかす。

鋭く、固く、そして美しい、龍の鱗。

「クロちゃん、いったいどういうことなの？いきなりこんなことして……」

「話してる時間は無いんだな、これが」

指で弄もてあそんでいた鱗をはじき飛ばすと、黒翼は番傘をいったん後ろへ引き、再び畳を蹴って跳躍した。が、それは大きく右へ迂回うかいして斜め後方から柩を打とうとする。汐が精一杯の反応速

度で、柩の前に自慢の白い鱗を飛ばすが、そこに黒翼の姿はなかった。

上!?

汐は柩を突き飛ばして、自分が黒翼の標的になろうとした。むろん、ただではやられない。黒翼に向かって、龍の形をした水が何本も勢いよく飛び出し、黒翼に襲いかかる。

しかし黒翼は番傘を開くと、それらを全てはじき飛ばして、汐の上へと番傘ごと降ってくる。汐はすんでのところで、身体をダイブさせて、黒翼をかわした。

黒翼が接地すると同時にズンという重い音がして、床が崩壊し、畳がめくれ上がる。

もしあの下にいたらと思うと、ゾッとする汐。

「うあああ、おい、なにをするんだ!」

旅館を破壊されて、思わず大声を上げる柩。

「いいから、かなちゃんは私の後ろにいて…!」

柩を逃がすことは可能だ。しかし、一人にしたら逆に黒翼に追われてしまうと汐は思った。

それから汐は腕を広げてから何か印を結ぶような動作をする。

すると風が吹き始め、同時にどこからともなく水が空間から染み出してきた。

「おお、プラズマティックウォール……!」

吹雪と風と、そして汐の鱗によって築かれた水の壁は、まるで竜巻のように円を描き、黒翼を取り囲んだ。

渦巻く水は、電灯の光を反射して、美しい虹色を見せた。

この渦巻きに触れれば、例えダイヤモンドでも粉々に粉碎されてしまうだろう。さらに魔の力も通さないはずだ。

「うーん、あんまり時間がかかると、説明した方が早くなるじゃないか……」

黒翼が頭をポリポリと掻く。

実はそこは汐も不思議に思っていた。なぜ黒翼が柩を討つのは解らぬが、本気で柩を殺すつもりなら、とっくにできていたはずなのだ。

いくら自分が龍であり、様々な能力が使えたとしても黒翼に敵わないことは、初めてこの地に黒翼が来た時から解っている。自分でも知らない様々な術を黒翼は使えるし、同じ術でも黒翼の方が強い。さらに言えば、自分は戦闘には長けていない。こればかりはどうしようもない。だがこうして黒翼が接近戦に拘っているのは、手加減している証拠だ。

どうして手加減しているのか？

理由は解らないが、とにかく柩を守り通せば、黒翼は諦めてくれるのではないかと……と、汐は心の片隅に希望を持っていた。

実は黒翼も黒翼で、これが決心の揺らぎの表れだった。

黒翼は汐の持てる力のギリギリで対抗していた。これで汐が柩を守り切れれば、まあそれはそれで……とも思っていたのだ。

「お願い、もうやめて、クロちゃん……！」

ググッと汐の作った水渦うずの壁が黒翼に迫る。しかし優しい汐はそれ以上が踏み出せない。黒翼をその水渦でずたずたに切り裂けない。

黒翼はそれを知っているのか、その薄笑みを崩さず、ただ佇たまたんでいるだけだった。その姿は不気味で、汐は何の術を用意すればいいのか、見当がつけられなかった。

このまま黒翼を押しつぶしてしまってもいいものか？

いや、逆に、それを黒翼は待っているのか……？

とにかく自分だけの手に負えないと思った汐は、別の部屋にいる紗乃末璃に意識を送った。

『末璃にバレたぬ』

テトメトが黒翼とちあらに警告を送る。

『わたしが始末する』

大広間に向かっていたちあらはそう答えると、踵かかとを返して末璃の場所へ向かった。

とはいえ、勝負は一瞬で決めなければならぬ。なぜなら、ちあらの存在は汐に知られてはならないからだ。汐と末璃も自分たちと同じように、離れた所でも意思疎通がとれるはずだ。

となれば、汐に自分の存在を知らせる間もなく、末璃を落とさなければならぬ。

程なくすると、どたとどたという騒がしい音が聞こえ、紗乃末璃が走ってくるのが見えた。辺り構わず走っているように見えるが、ケーブル類をしっかりと避け、照明や機器類にもまっ

たく触れずに真っ直ぐ走ってくる。

二秒。

紗乃末璃が慌ててくれる時間はそれだけだと確信した。

ちあらは深編み笠を脱ぎ、廊下にある照明と花瓶の影に潜んだ。照明のおかげで逆光となり、末璃が走ってくる方向からは、完全な闇となって、解らない。

末璃の足音がしだいに大きくなってくる。

ちあらは薙刀に力を込めると、末璃が自分の目の前を通り過ぎる瞬間、末璃の足に薙刀の柄を突き出した。

「うおっ!？」

末璃はそれを素早くジャンプしてよける。

「なんだあ!？」

と、薙刀が出てきた方に視線を移すが、そこには何もなかった。

「ふぐっ!!」

同時に左胸に激痛が走る。その痛みは一つの点から、全身へと広がっていく。

「はっ……くっ……」

しまったと思った。自分の足許を邪魔した場所を見たのでは、すでに遅かったのだ。敵は疾とうに自分の真後ろに回っていたのだ。

左のあばらが砕けたのは解ったが、痛みあまり、思うように身体を動かせない。

一方のちあらは薙刀の底を末璃の胸にひっかけたまま、末璃の身体をひっくり返すように頭から廊下へたたき落とした。しかし末璃も然る者で、脳天から落ちるのだけはさげようと、落とされる瞬間、必死に首と肩をよじった。

肩から派手に落っこちる。鎖骨きこつが折れ、皮膚ひふを突き破って飛び出した。

あまりの痛みに末璃はただうづくまって呻うめくことしかできなかった。そして、自分を攻撃した相手の姿も確認することができなかった。

しかし時間は残念ながら、三秒。

状況を伝えられないまでも、末璃が黒翼ではない誰かにやられたという情報は、汐に伝わったとちあらは考えた。ならば、その末璃を阻止した存在を探そうとするだろう。

『テトメト、紗乃末璃の手当を。少しやり過ぎた……』

とっさの行動で手加減するのは難しい。

『わかったぬ』

すぐさまテトメトが現れたのを確認すると、ちあらはその場で座禅を組み、精神を統一した。目をつぶり、全ての気を押さえ込む。

『どうしたの、末璃……末璃!?』

汐は急に反応がなくなった末璃に呼びかける。

「いったいこの旅館の中で、何が起きているのか？」

汐はここでようやく旅館内に意識を張り巡らそうとした。

すぐに大広間から伸びる廊下で、末璃がうずくまって倒れているのを見つけた。そのそばにはテトメトがいる。そういえば黒猫もいたことを汐は思い出した。末璃はテトメトに阻止されてしまったのだろうか？だが、テトメトは末璃を手当てしているように見えた。

とは言え深く考察している余裕はない。さらに意識を旅館全体に広げる。

玄関先で倒れているたくさんの人。あのインタビューをしていた女性も……。客や他のＴＶクルーが玄関先に集まって大騒ぎになっている。警察が来るのも時間の問題だろう。

しかし、テトメト以外に不審な存在は、発見できなかった。

となると、目下問題なのは目の前の黒翼と、末璃のところにいるテトメトだと汐は考えた。

「風雲急を告げる……！」

黒翼は汐の気を引くために、汐と目を合わせた。

「な、なに？」

汐の意識が黒翼に向く。

黒翼はちあらがこの大広間に到達したのを確認すると、大仰な動作で息を大きく吸い込んだ。すでにちあらは打刀を抜いており、音もなくこちらに向かって来る。

タイミングを見計らって、黒翼は両手を広げて大声で呼ばわった。

「聞け、
高志^{コシ}之^ノ八俣^{ヤマ}遠呂^{マダ}知^チ、
目醒めたり!!」

黒翼の聲が大広間に響き渡る。

汐はその黒翼の言葉を解釈するのに、少しの時間を要した。

高志之八俣遠呂知、目醒めたり。

一字一句を確かめるように、汐は頭の中でその言葉を反芻した。

「ヤマトノ……オロチ……が？ まさか……!!」

そしてすべてを理解した。

なぜ、

黒翼が、

草薙柩を、

殺しに来たのか！

「さすれば！」

汐は禅問答のように黒翼に言葉を返す。同時に黒翼を取り囲んでいた水の渦が、いっそう狭まり、黒翼に迫る。いくつかの鱗が渦より飛び出し、黒翼の着物を裂こうとした。

「日本は、終わる……！ だから、柩の命をもらいに来た！」

黒翼はこれでもかというほど薄気味悪い笑みを浮かべると、そう言い放った。同時に、汐の視界の片隅に映っていた草薙枢の姿がおかしな方向に歪む。

「かなちゃ……!!」

しまったと思った時には、すでに遅かった。

ゆっくりと——いや、汐はすぐさま行動したつもりだったが、汐には非常にゆっくりと感じられた——枢へと振り返るその視界の中で、枢の頭があり得ない方向に傾き、そしてそれはやがて胴体より離れ、ぐらりと重力によって下へ引っ張られていく。

その崩れゆく枢の向こうには、すでに打刀を鞘に収めんとしている銀髪の巫女の姿があった。「悪いね、汐、わたしは最初から囮おとりだった」

歪みきった笑顔は、勝利を確信していた。

畳の上をごろりと枢の首が転がる音。

そして真っ白なはずの汐の髪は、草薙枢からしとどにあふれる鮮血で真っ赤に染まっていた。

「あ……あ……あ……」

汐は事態を飲み込めていないのか、身体を震わせながら、自分の足許に転がる枢の頭を抱きかかえる。

「たった今、高志たかし（北陸）が日本海に沈んだ、次はどこが沈められるかな？」

黒翼はそう言って、荒れ狂う水の渦をもともせず、その手を汐へと手向けた。

「クロちゃんの……クロちゃんの……」

だが、汐は黒翼の言葉に耳も貸さず、肩をふるわせる。

「あ、いかん。逃げる！」

何かを察知した黒翼の姿が、一瞬で消える。

それを見たたちあらも、軽く頷くと、地を蹴って大広間から飛び出した。

いつの間にかテトメトがちあらの頭に乗っていた。

「クロちゃんの、バカ———!!!」

大声で叫ぶ汐の声と、建物が崩れるような音を後ろに聞きながら、二人と一匹は草薙旅館を後にしていた。

* * *

「おー、絶景かな、絶景かな」

田沢湖にほど近い山から湖を眺めながら、黒翼は満足そうに頷いた。

湖畔からは、田沢湖を覆い隠さんばかりの巨大な二柱の龍が、天に向かって昇っていくのが見える。雨雲がかかっているので、龍はその雲の中に吸い込まれているようにも見えた。

「あーあ、本当に呼び覚ましてしまったぬ」

「八岐大蛇ヤマタノオロチに対抗するにはこれしか、ない」

「あとで何を言われても知らないぬ」

「北陸がなくなるほどの大惨事なのに？ 下手したら、一〇〇万人以上死んでると思うよ？」

「……………」

「ま、別にわたしが八岐大蛇を倒す義理もないけどね」

「とはいえ、八岐大蛇に暴れられたら色々と面倒」

「うむ、わたしより目立つなんて、許せない！」

「そこかぬ」

「あ、こっちに気付いた」

ちあらが空を見上げると、深編み笠のツバをツイと上げた。

頭上の雲が急に真っ暗になったかと思うと、それは大きな龍の影を形作った。

「お、いかん、まずはわたしらに一発お見舞いするくらいのことば考えてそうだ」

「あんなに荒い起こし方をしたら、怒るなって方がムリな話ぬ」

「とりあえず逃げよう」

「作戦はそのあとで！」

「まったく……………」

二人と一匹は滑るように山を下りていった。